メガネと天狗の山

五目御飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メガネと天狗の山

【Ｎコード】
Ｎ４９３９Ｚ

【作者名】
五目御飯

【あらすじ】
地に足が届かない女子中学生と、空気的存在感を誇る天狗が、同棲しているらしい。彼らの日常を観察・記録をするため、筆者は立ち上がった。得た情報は適宜読者の皆様にお知らせするとともに、彼らの生態系を詳細に研究していく所存である。どうにもつまらない結末になりそうであるが、少しでも興味を持った同人は付き合ってほしい。今――筆者の冒険が始まる。

イ（前書き）

筆者は決意したのだ。タイムマシンに乗り、天狗が現れた時代へ旅立った。空に閃光が！　「ドーン」という音に驚きを隠しきれないまま、筆者は口を開いたまま、呆然と空を眺めていた。天狗である。本物だ。誰か偉人が亡くなったのか、天変地異の前触れか、幼児が病気なのか、おめでたなのか。筆者は天狗に駆け寄った。倒れる天狗。危険を顧みず、それに近づく筆者。天狗からは煙があがっている。「大丈夫か」「大丈夫だ、問題ない」。ブイサインを返す天狗。苛立ったので、取り敢えず蹴っておく。それから、その天狗の姿を見かけたのは、ある山中を歩いていたときであった。これは…跟けるしかない！

イ

ナキは非常に困っていた。
人の子が懐いてしまった。
人の子はナキに抱きつき、こう言うのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ」

ナキは非常に困った。
なぜなら、彼は天狗だから。

彼是、一刻ほど前である。
ナキは山中を散歩していた。
久々の外出であった。
冬の風が頬に当たる。冷える身体を包むように、ナキは両二の腕を持つ。
本当は、祠の奥で休んでいたかった。
しかし、そうもいかない、用事ができてしまったのだ。
人間様に呼ばれてしまった。
山神たるもの、人がいてこそ存在できる身。
お呼ばれされたからには、行かねばならぬ。
“山神”と言ったものの、天狗という存在は、まあ不思議なものである。
神という人間もいれば、物の怪と呼び、避ける人間もいる。
善か悪かといわれると、どうにも首を傾げる存在。

生き物であるかも定かではない。
ただ、腹は減るらしい。

さて、話は戻る。
自分の名を呼ぶ人間の様子を見に、祠を出た。
どうやら、自分の名を呼んだのは童子らしい。
童子は社の前で泣いていた。
華奢な身体は、ちゃんと仕事ができるのかと尋ねたいほどである。
華奢というより、痩せ細った、と表現した方が正しいかもしれない。

「おれを呼んだのはお前か」

上から目線の、低い声。見下した目は童子を睨み付けているようである。
別に、そういうつもりはないのだが。

「ああ、来てくださった。うれしゅうございます、ナキさま」

「用件を述べよ。おれは頗る眠い」

ナキの登場に感動していた童子は、心底驚いていた。
天狗も寝るのだ。

「迷子になってしまいました」

なんということか。
迷子になったからと、呼び出されてしまった。
さっさと童子を人里に帰し、自分も帰宅して飯食って寝よう。ナキは今後の予定を組んだ。

「お前の里はいずこに」

問うと、童子は谷を指して「あの辺りです」と言った。
苦手な里であった。
あそこの住人は、どうも気性が荒い。
空腹に耐えかね、里に下りると、彼らは石を投げてきた。
飢饉であったこともあるだろうが、そこまで露骨に追い出そうとしなくても。
ナキは以降、あの里に下りることを避けている。
まさか、このような形で再度訪れることがあろうとは。

「よろしい。目を瞑りなさい」

童子が目を瞑ったことを確認。
ナキは童子を抱え、里まで飛んだ。
久々に飛ぶと、気持ちのいいものである。
引き籠り生活が長すぎたようだ。
食料は山の動物が持ってきてくれるため、生きるに困らない。
堕落した生活を送っていた。

ナキは童子を里の入り口で降ろした。
目を開けるよう言うと、童子は素早く、目を全開させた。
大きな目がこちらを見つめている。
ナキはたじろぎ、目を逸らす。
視線は止まない。

「なんだ」

我慢できず、こちらから声を掛けた。
すると、童子は言ったのだ。
「うちな、ナキのお嫁さんなるわ！」
どういうことだろう。
厄日なのか。今まで堕ちた生活を送っていたことに、天災がやってきたのか。
天狗そのものが天災であるはずなのに、どういうことだろう。
この里の人間は、どうもこの天狗を困らせてくれるらしい。
敬語もどこかへ行ってしまった。
「ああ、その。反応に困るから、そういうことは」
「天狗様がうちに来られたら、母上もお喜びになる！」
童子と思っていた人の子は、どうやら女であったことが今更発覚した。
さておき、事情が呑み込めない。
「どういうことだ」
「天狗様が家にいると、その家は裕福になるのです。昔からの言い伝えです」
座敷童かなにかと勘違いをしているのではないだろうか。
だが、座敷童は家の守り神であり、裕福にする神というわけではない。
この里だけに伝わる話だろうか。
そんなことはどうでもいいのである。
ナキはそろそろ、空腹と眠気のダブルアタックに倒れそうなのだ。
帰ってもよいだろうか。

「うちの家は貧乏でな、畑はよう荒らされる、男手はおらん、女兄弟ばっか。母上も床に伏せ……」

彼女は顔を伏せ、鼻をすすりはじめた。
泣いている。
女の泣き声は苦手である。
ナキは彼女の頭の上に、手を乗せた。
すると、瞬時に彼女の手がナキの手首を掴んだ。
油断していたこともあり、引っ込める暇もなかった。

「というわけで、どうかナキ様、天狗様。うちの家に来てくれん？」

嘘泣きであったらしい。
大体の人間は、泣けば顔が赤くなるものだが、この娘の顔は先程と変わっていない。
元気で、明るい笑顔が、こちらを見つめている。
とはいえ、言っていたことは事実らしく、やせ細った手足は、見ていて折れそうで怖い。
なんとかしてやりたいと、ナキの良心は訴えている。
だが、こちらも非常事態なのだ。

「すまない」

ナキは、彼女の顔を見ずに、小声で言った。
謝罪の言葉は、彼女に届いていただろうか。
確認する余裕もない。
ナキは、人の子を置いて、山へ帰った。
また、飯食って寝たら、来るから。
なんて、自分勝手なことを発言することはなかった。「また来る」

とも言えなかった。
言えば良かった、と後悔したのは、祠で遅めの朝食を摂っていた時であった。

ロ（前書き）

現代日本に帰ってきた。時は２０１１年１２月。冬至も近づくある日のことである。ある女子中学生を見つけた筆者は、彼女を追尾せざるを得なかった。眼鏡をかけ、髪を二つ括りにした美少女であったからだ。これは追尾せざるを得ない。セーラー服が良く似合ってらっしゃる。いい匂いがしそうであるが、近づく勇気は無い。すると、まさかの目標確認。筆者が追っている例の天狗の登場である。美少女戦士の前に黒いタキシードを着たイケメンが、などという展開ではない。寧ろ、筆者としては悪役がやってきた気分である。「ろっとぉ、驚かせてしまったな」「これは何だ」「それは昨日言っただろう」。

ロ

華子は咄嗟に耳を塞いだ。
突然の爆音である。
同時に、空中で何かが爆ぜた後があった。
青い光の線が、重力に引かれるように地へ向かっている。

「うわ…花火かな」

華子は訝し気にその空を見ていた。
周りの人も華子と同じ方角を見ている。
自分だけが見た、錯覚というわけではないようだ。
新聞の夕刊を見れば正体はわかるだろう。
それでなくても、インターネットを使えば、あれが何であるか分かる。
便利な世の中になったものだ。

津久井華子。中学生である。地元の公立中学に通う、帰宅部の少女だ。
容姿のせいか、「頭が良さそう」だと言われることが多い。
実際は、通知簿が家にやってくるたびに、親が冷や汗をかくほどの成績である。
第一印象が「頭が良さそう」であれば、得をすると言えばする。
たとえば、試験の面接などがそうだろう。
ただ、長く付き合うだろう相手に「頭が良さそう」などと言われた日には、華子は困ってしまう。
相手の期待を裏切る真似などしたくない。

とはいえ、勉強なんてやってられない。
少し、不良っぽく装ってみようか、などと考えた。
それは親の期待を裏切ることになる。
華子は溜息を吐いた。

放課後である。
帰宅したところで、華子がすることは、自分の夕飯作り。
洗濯物も取り込まなければならない。
その前に夕飯の材料は家にあっただろうか。
華子は「家に帰りたくない」の一心で神社に足を向けた。
中学生になってから、学校のある日はいつも通っている。
どうせ、帰ったところで両親はいないのだ。

両親は各々別の地へ単身赴任中だ。
と言えば、華子の両親に非難の声が行きそうである。
彼女の両親は悪くない。
なぜなら、彼女の両親は別に単身赴任をしているわけではないのである。

華子の両親は自宅から職場へ通勤している。
二人とも朝早く出かけ、夜遅くに帰宅するため、自分の身の回りのことは自分でしなければならない。
物に不自由をしないところは、一人暮らしと異なる点だろう。

そんな前振りの話はどうでもよい。
華子は神社のお宮の前にある階段に座った。
缶コーヒーのタブを立て、元に戻す。
そして、口に運ぶ。
二、三口飲み「あ〝ぁ〝ー」とかオジサンのような声を出す。

これが彼女の日課である。
恋する年頃になれば、オジサンのような声を出すことはなくなるだろう。
だが、しばらくこの日課は続く。
両親が仕事を辞めることはきっとないし、引っ越す予定もないのだから。

「暇だー」

華子は缶コーヒーを脇に置き、階段に座ったまま背伸びをした。
両腕を上げ、思い切り伸びる。勢いで目を瞑る。
気持ちがいい。
一日の癒しタイムである。
瞑っていた目を、徐に開く。

「うわあああ！！」

華子は声を上げて階段から離れた。そんな。
立ち上がれ切れてない体勢のまま、気合で移動したため、勢いで尻もちをついた。まさか。
見間違えかと、目を擦るが、それは、そこにいる。

「は、羽」

声が裏返っている。
そんなことを気にしている場合ではない。
目の前には、ひょっとこの仮面を着けた人がいた。
その背には羽がある。黒い、鳥の羽のようだ。

「そう逃げないでくれよ」

目を開けると、眼前にひょっとこの仮面。驚かざるを得ない。逃げざるを得ない。

まじまじと、ひょっとこを見る。全身を見る。

ひょっとこの仮面を着用しているという点と背中の黒い羽以外、異常な個所はない。

いや、十分異常か。

それらを除けば、自分の父親に似た、細身の成人男性。といった感じの印象である。

「恥ずかしいから、あまり見ないで」

なんだ、こいつは。

声の低さから、男性だと窺えるのだが、なんだろうこの気持ち。

「きもい」

そうだ。気持ちが悪い。「きもい」と略したニュアンスの方が近い。

声に出して分かる、自分の気持ち。

「酷い」

ひょっとこは、両手で拳を作り、合わせた。それを自分の顎のあたりに寄せる。

わぁ、気持ち悪い。

「いやぁ、久々に空飛んでたら、制御利かなくなっちゃって」

ひょっとこは後頭部を掻く真似をする。
華子に近づき、左手を出してきた。華子は思わず、自分の左手でその手を持った。
強い力で引っ張られ、立ち上がる。
大きい。華子の感想である。
ひょっとこは仮面を着けているため、どんな顔をしているのか分からない。

「空、飛んでたって」

華子は訊ねた。気になる単語である。
飛行機が墜落したのだろうか。それでこの雰囲気。ありえない。
別の可能性を考える。
先程の爆音を思い出す。
いや、違うだろう。
考えを巡らせる。
それに終止符を打ったのは、ひょっとこからの告白であった。

「おれ天狗なんだけどね。しばらく引き籠ってて、空の飛び方忘れちゃったの」

ひょっとこはおどけてみせる。
仮面に右手を掛け、左手で耳に掛けていたゴムを外す。
まさかの「おれ天狗」発言に呆然とする華子。
さらに露わになった天狗の素顔に、華子は声が出なかった。

ハ（前書き）

筆者は今日も地をかけてる。牛丼が食べたい盛りではあるが、松竹梅のどれが一番小さいサイズなのかよくわからず、とりあえず一番安いの選んだらいいことに気付いた。天狗の背中から黒い羽を生やしたすがたは、まるで烏が人になろうとして失敗したかのようである。無駄にイケメンである。イケメンとかリア充とか、見ていると苛々してくるからさっさと爆発してしまえばいいのに。クリスマス中止のお知らせはまだ彼らの元には届かない。「気の毒に。堕天した時に声を失ったんだな」。

ハ

引き籠り生活約四百年。
情報は表の動物から仕入れていたが、予想外の景色に、ナキは絶句した。
いつかに人の子を送った里は、枯れている。
山の、里跡と反対側の平地を見ると、四角い建物が多く並んでいた。
空気が汚い。
空腹に腹を抱えつつ、取り敢えず世の中を見に行くことにする。
空を飛ぼうと、背の翼を広げる。
抜け毛ならぬ抜け羽が酷い。
飛べるだろうか。
ナキは少々不安になりながら、羽を動かした。
身体が浮いた。とりあえず安心するが、正直羽があってもなくても飛べるのは内緒だ。
そのまま、街の上空へ移動。
それにしても、カラフルな世の中になったものだ。
読めない文字がかかれた看板には、気持ち悪いくらい肌の白い女の姿がある。

「うわ、マジキチ」

ナキは、街中に降りようと試みた。
しかし、どうも降下の仕方が分からない。
制御不能になり、そのまま墜落。
運よく、墜落先は人気のない神社であったため、休憩をすること

にした。

「それで、ここにいると」
「そういうこと」
「現実味が無いにもほどがあるな」

華子は缶コーヒーを飲む。
ひょっとこの仮面を外した男、ならぬ、天狗は、予想以上に綺麗で端整な顔立ちをしていた。
顔のパーツが見事なバランスをとって並んでいる。
華子は顔を合わせるのが辛く、鳥居を見つめている。
天狗の名前はナキというらしい。
ナキは自分の過去の話を大雑把にした。
それ以前に、天狗とは何なのかについて教えて欲しい。

「もっとかっこいい登場をしたかったよ」
「へえ」

具体的にはどのようだろうか。
空中で１０回転して華麗な着地。
派手なステージで歌って踊って。それも、下から上がってくるステージ。
「あの時の人の子には、ちょっとかっこいい言葉で喋って、天狗のイメージアップに成功したんだ」

本当に成功していたのだろうか。
かっこいい言葉で喋ったところで、イメージが良くなるとは限らないのではないか。
そんな疑問は喉の奥にしまう。

「華子さん。お願いがある」

ナキは顔の前で両掌を合わせる。
勢いよく合わされたため、音が鳴った。

「食物を恵んでほしい」

華子の財布の中には５００円玉が一枚、夕飯の材料代にあるだけである。
ナキに奢るのであれば、自分は夕食抜きの覚悟をしなければならない。
どうしたものか。
華子が財布とお腹の中と相談をしていると、ナキが口を開いた。

「丑年生まれの牛を一頭くれたら十分なんだ」
「殴るぞ」
「何故！？」

天狗というのは肉食なのか。丑年生まれ限定なのか。
華子が、思わぬ事態に思考を巡らせていると、この天狗は信じられない一言を放った。

「そうか、お前馬鹿か」
「失礼な。何を根拠に」
「常識だろ。餓鬼に出会ったら自分の干支と同じ午を捧げる。常識

だよ」

「常識だ」。二回もいい、強調してきた。

華子は少々苛立った。そして、ある疑問が浮かぶ。

「なんで私の干支を」

「そういうのは、わかる子なのよ。本当に知らない見たいだね。外見からすでに阿呆そうだしな」

「ほっとけ」

華子は深くため息を吐いた。

なぜ神社に来てしまったのだろうか。

後悔はそこから始まる。

日課だったから。言えば、悪いのは華子ではない。ナキにある。

苛々していると、ふと、天狗の言葉が脳内で再生された。

「外見からすでに阿呆そう」。

初めての意見である。

華子はその一言に、ひどく感動した。

牛一頭は不可能だが、牛丼一杯なら奢れる気がしてきた。

「牛丼でもええ？」

「牛丼？　まぁいいや」

初めて聞く料理名に、ナキは首を傾げた。

天狗はその辺りに蔓延る餓鬼とは桁が違う。天狗というのは誇り高く、心が広い。

と、自分で自分に幻想を抱いてみる。

正直、食べられたらなんでもよいのである。

ナキは、財布の中身を確認する華子を凝視した。

次にどのような行動を起こすのか。

見ていると、華子の手が止まった。

「どうした」

この天狗の姿、他の人には見えるのだろうか。
今更であるが、大事な問いである。
もし華子にしか見えないのであれば、外食はまずい。
見えていても、羽や服装が目立ってしまい、よろしくない。
訊くべきか。
また馬鹿にされるのがオチなのだろうが、本人に尋ねることしか彼女の疑問を解消する術はない。

「天狗って、他の人にも見えるん」
「さあ」

適当な返事である。
興味もなさそうである。

「よし、わかった。今から牛丼買ってくるから、ここで待っとって」

一番無難な選択である。
持ち帰りができる牛丼を買えばよいのだ。
人目も気にせずに済む。
ナキに提案をした華子は、彼の返事を待たぬまま、財布を鞄にしまった。

「それは困るよ。お前が戻ってこなかったらどうするんだ。空腹のあまり、おれは自分の山に帰ることもできないんだよ」
「背中から羽を生やした野郎と一緒に買い物なんかしたくない」

華子が言うと、ナキは「ああ」と何か納得したような声を出した。
ナキは両掌を勢いよく合わせた。音が響いた。
先ほど両掌を合わせたときとは違う音である。
音がした、というより、響いたという表現が適切である。
ナキの背にあった翼が、みるみる透けてゆく。
初めて見る光景で、気味の悪い光景であった。
完全に見えなくなった羽。
翼が生えはじめはどのようになっているのかと、ナキの背中を見た。

「服に穴が空いてない」

無意識に呟いた。
そもそも、羽が見えていたとき、ナキの服はどのようになっていたのだろうか。
いったいどのような仕組みなのか。
夢でも見ているのではないか。
華子は右頬を抓った。痛い。確認してすぐに離しても、まだ痛みがあった。

「ね、大丈夫でしょ」

ニ（前書き）

パンを購入したのだが、持参するのを忘れた。忘れ物ボックスは空っぽであるから、きっと家にあるのだろう。そんな筆者のパンは、いつのまにか誰かに食べられていた。少し衝撃を受けたため、筆者は隣の人のパンを食べることにした。すると隣の人が衝撃を受け、河童の皿を投げてきた。筆者はよける。すると筆者の後ろにいた河童が河童の皿を受け止め、自分の頭上に乗せたではないか。驚きのあまり、筆者は文字を書き始めた。「よし、行こうか。今度こそ楽しい旅になりそうだ」

二

「全くもって大丈夫じゃない。その服なんとかならんの」

ナキは山伏装束をまとっていた。

現代の街中を歩こうものなら、注目の的である。

「華子さんが着てる服ならいいかな」

「よくない。やめろ」

華子が着ているのは中学校の制服である。

普段着ならまだしも、さすがにスカートはまずい。

「困ったな。体も羽見たいに消えへんの」

華子が問うと、ナキは「おお」と感嘆の声をあげた。

ナキの言葉を聞くまでもない。きっと消すことができるのだ。

そんな問答を終えた二人は、帰路についている。

スーパーマーケットで適当な牛丼を購入。

神社に戻ってもよかったが、冷えるため、華子の家に行くことになった。

華子がナキを自宅に招いた。

理由は、ナキから見た自分の印象。
馬鹿っぽいというのは、褒めたものではないが、華子としては最高に近い言葉であった。
その上、天狗という存在に心躍っている。
夢に見た“魔物”というものだ。
ブラウン管越しではない。目の前にいる。
その事実が、華子のテンションを上げた。
天狗の話を聞きたい。なら、自宅に招けばいい。
少々飛躍した発想である。
華子は今後のことを特に考えていなかった。

「うわ、何これ」

ナキの、華子宅に上がった第一声。歓声である。
想像していた一般庶民の民家とは、かなり異なっていた。
スーパーマーケットにも、帰路道中も驚きの連続ではあった。

「もういいよ」

華子の声に、ナキは姿を現した。
神社を出てから今まで、ナキは姿を消していた。
消すといっても限界があるらしい。
華子のような、ナキの姿を知っている者には、意味がない。
ただ、華子の目には羽は映っていない。
山伏衣装の成人男性がそこにいるだけである。
天狗だと知らなければ、衣装さえなんとかすれば、その辺りで歩いている男性と変わらない。

「こっち」

物珍しげに辺りを見回す天狗。
玄関から中に入ってくる様子でないため、華子は声をかけた。
「下駄脱いでね」と一応言っておく。
土足で入ってきかねない空気があった。
ナキのその後の様子を確かめず、華子は階段を上った。
両親の部屋は一階、彼女の部屋は二階にある。
こういうときは一戸建てでよかったと思う。
天狗が家にいるということが知られる危険性が少ない。
華子は自室の襖を開け、ナキを待った。

「びっくりした。今の日本の家屋は面白いね」
「そうなん？よくわからんけど」

華子はナキを部屋に入れた。
襖を静かに閉じ、振り返る。

「なにしてんだ」
「いやぁ、久々の畳に死にそう」
「死んでしまえ」
「酷い」

ナキは床に伏していた。
彼女の部屋は和室である。襖を開くと畳が部屋一面に敷いてある。
スッキリした部屋だ。生活空間は机周辺だけである。
教科書類はきれいに整頓され、本棚に収まっている。
机や本棚と畳の間には、カーペットが敷かれ、畳を少しでも傷めないように工夫されている。
若者が好きそうな小洒落た服だの鞄だのの姿が見当たらない。
布団は押し入れにあるだろう。
人のにおいも薄く、畳のよい匂いが部屋を満たしていた。

「ちゃぶ台なんてないから、適当に食べて」

華子は牛丼の入ったビニル袋をナキに渡す。

礼を言いながら、ナキは受け取ると、中身を取り出し、蓋を開けた。

よい匂いが辺りに広がる。

スーパーマーケットの電子レンジで温めた牛丼は、まだ温かいままであったようだ。

ナキが牛丼を頬張る横で、華子は少々反省していた。

ナキを招待したことは、後悔はしていない。

だが、今後どうすればよいのか考えていなかった。

現時刻は午後6時を回ったところ。

母の方が先に帰宅するが、基本21時過ぎである。

後3時間。それまでに、ナキをどうするべきか考えなければならない。

落ち着け。そもそもナキを家に泊めるとは言っていないし、彼も希望していない。

「食ったらどこ行くん」

華子は聞いてみる。

ナキは最後の一口を飲み込むと、「うーん」と呻った。特に予定はないらしい。

「そもそも、なんで急に祠を出ようと思ったのか分からないんだよね」

ナキは言う。

四百年引きこもっていたというのに、今になって表に出た。

何か原因があるはずだ、といいつつ、あては無い。
できることであれば、地上を散策したい。
羽で空を飛ぶのは力を使うため、なるべく飛びたくない。
自分の山に帰るのには空を飛ばないと時間がかかってしょうがない。
そこで。

「泊めてほしい」

華子は考えた。
ナキを家に泊めたところでなんのメリットもない。
デメリットしかない。
しかし、おもしろそうである。
天狗。ナキが本当に天狗であるかは定かではないが、人間ではないことは確かである。
これが夢であれば残念であるほど、今、華子は興奮している。

「泊めてやろう」

上から目線であることは、御愛嬌である。
彼女は、この口癖のせいもあり、教室でも浮いていることは察しがつくだろう。
加え、あまり後先考えず、夢見がちであることも問題である。

「ありがとう！　華子さんいい人！」

ホ（前書き）

普段は特に占いを見ないというのに、今日に限って星座占いを見てしまった。結果は１２位。星座は１２。順位は１２。つまり最下位である。内容は、今日は言葉に注意すべき一日になります。深く考えずにした発言が命取りになる可能性があるのです。会話をする時は相手の気持ちをしっかりと思いやるようにしましょう。無理だろ。普段あまり占いを信じない筆者でも、正直リアルすぎてもう駄目だろ。そういえば、普段から口は悪いから変わらないんじゃ。「ああ、やっぱり今回も駄目だったよ。これを見ている奴にも付き合ってもらうよ」。

ホ

ナキを自宅に招いた本来の目的。
天狗の話を聞く、ということを忘れてはいないだろうか。
物珍し気に、室内の物や窓の外を見るナキを、華子は呆然と見ていた。
端整な顔立ちをした男が、乙女の部屋を吟味している図は、何とも面白い。
などと思っている場合ではない。
華子は思い出したかのように、本題に乗り出した。

「ナキ。天狗について話が聞きたい」
「いいよ。何から話そう」
「天狗というものが何なのかが既に分からない」
「うん。初期の天狗についての話からでいいかな」

華子は黙って頷く。
興味津津に、ナキの言葉を待つ。
眼鏡をかけているだけあって、普段目は細い華子。
それが、開かれている。
色素が薄い。
ナキは、今の華子にそんな感想を持ちながら、口を開いた。

「天狗とは流星。昔の人が空から落ちてきた隕石をみて、天狗と呼んだんだ」

最も古い記録は『日本書記』である。
ナキも中身を確認したわけではないため、どのような記載がなされているかは知らない。
「神鳴り」を鳴らし、天から降ってきたイヌ。
隕石が着地した様子が、犬のようであったため、イヌとされた。
「イヌ」その漢字が「狗」であることは注目所である。
「天狐」と呼ばれることもある。
それは、天狗も狐も同じようであったからだとか。
どちらも人間にいたずらをしては、困らせていたとか。
ナキは引き籠っていたため、そんなことをしていた仲間がいたなぁ、程度である。

「話が逸れた」

流星と天狗が深く結びついたのは、旻のおかげ、というべきか、旻のせいというべきか。
旻とは、僧侶のことである。
旻は飛鳥時代…ご存じ、聖徳太子がいた時代の人物である。
彼は遣隋使として隋に留学。
中国の思想などを学び、帰国した次第である。
その知識の中に、流星と天狗の話がある。
星が流れていれば、それは流星ではなく、天狗である。

「そんなこんなで、この国に天狗という妖怪が現れた」
「天狗って妖怪なん」
「…知らなかったの」

ナキは驚いた様子で、華子を見た。
目が全開しており、目が「信じられない」と声を出しているようである。

華子は目を逸らした。
天狗は狛犬であるとか、獅子の類だと予想していた。
名称どうあれ、実在するものだと思っていたのだ。
少々の恥ずかしさが込み上げてくる。
華子は、妖怪が実在しないものと括っていた。
それが、目の前に天狗が居て、つまり妖怪が居るということである。
自分の世界観がいっきに変化した。

「華子さんの家に来るまでも、あまり見かけなかった。数が減ってるのか、山に籠ってるのか」
「数とか、減るの」

ナキは頷いた。
妖怪は、人に忘れられると、姿を消す。
ナキも一度経験がある。
完全に消滅したわけではない。
身体の末端が、透けてくるのだ。
手足が透け、向こう側の木が見える。踏んでいるはずの地面が見える。
痛みはないが、妙な感覚ではある。
人間のように、痛みに苦しみながら消えて行きたいものだ。
こういうときに、自分が妖怪であることを実感する。

「ナキはなんでまだここにいるんだ」
「その訊き方どうかと思う」

ナキは苦笑する。
自分は結局、ここにいる。
ということは、誰かが自分のことを想ってくれたからだ。

一体誰が。
そもそも、その経験はいつごろのことだったか。
もしかすると、今回祠から出ようと思ったきっかけと関わりがあるのではないか。
華子に答えられないまま、ナキは頭をフル回転させる。
答えはみつからないが、これだけは言える。

「まあ、いいじゃない」
「そーね」

華子は呆れたように溜息をする。
すぐにその表情は笑いにシフトし、「続きを聞かせて」と催促した。

「それから天狗は一度姿を消した。次に登場するのは四百年後の平安時代」

『宇津保物語』や『源氏物語』に天狗の名がある。

「さて、その源氏物語。少々面白い表現があるんだ」
「どんな」
「天狗が騙したのではないか、という記述があるんだけど、後に、狐が騙したのでしょう、とある」
「つまり」
「天狗も狐も同じような生き物。人間を騙す化物としていたということさ」

ナキはお茶を一口飲む。

「華子さんに、天狗の外見ってどんなイメージかと聞きたかったん

だけど」

天狗が妖怪であるということでさえ知らなかったのだ。

ナキは、答えは返ってこないだろうと括っていた。

予想に反し、華子は天狗のイメージを、ナキが欲している答えを見事に返してくれた。

赤い顔であったり、鼻が高かったり、烏天狗であったり。

「いい返事だ。では、なぜ顔が赤いのか、鼻が高いのか、烏なのか」

「人が勝手に想像したんちゃうん」

「そうだね。人が勝手に想像したんだけど」

ナキの言葉は、そこで閉ざされた。

襖が開いたのだ。

華子は襖に背を向けていたため、ナキが突然黙ったことを疑問に思った。

襖は静かに開閉が可能である。

ナキの話に夢中であった華子は、余計襖が開いたことに気づかなかった。

ナキが襖の方を見ているため、何事かと、華子は振り返った。

母である。

時計の短針は七の字を指している。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4939z/

メガネと天狗の山

2011年12月26日00時52分発行